

文化高知 46

これからの商店街を考える

岡本 純一

最近の市場調査でも家庭は単に消費する場になりつつあるが、つい最近までこの家庭でも魚をうまく料理したり、漬物をつけたり、彼岸になればダングのひとも作ったものだった。今ではこのような伝統的な生活慣習や知識や技術は少なくなり、時間の制約と共に忘れられようとしている。

商店街や市場で買物する楽しさは、顔と顔、人と人のふれあいと共に生活の情報や知識も一緒に購入し、学ぶことができることにあった。しかし、今日のようにマスメディアが発達してくると、個性的な生活指向を目指す現代人が好むのはそのような対話のないマス感覚での商法なのであって、また我々商店自らが大量生産、大量販売時代の洗礼を受けて以後、不幸なことに顧客をマスとして扱う習慣を身につけてしまったかもしれない。

最近の消費者は、商品知識も豊富でよく学び、よく体験している。隣が買ったからといって自分の家でも買うということや、安いからといってもう一つ買うということもなくなった。

自分の生き方、生活の仕方に合わせて買物をするようになり、さまざまな人がさまざまな生活パターンを持つようになったり、さまざまな店が必要と



波 片岡福光

なってきた。また所得も増えたので、さまざまな買い方をするようになった。しかし、消費者はいつの時代において

も受け身で選択する自由しかない。趣味趣向に合わせる、自分の求める店が地元になれば他都市へ出かけるである。主導権、リーダーシップは売り手側の商店にあるのだから、我々もつと学び、もつと新しい生活の仕方を伝える使命がある。

ある雑誌に、商店街活性化には「バカモノ・ワカモノ・ヨソモノ」が必要と強調して書いてあった。バカモノとは街のために損得がなく働くメンバー、ワカモノは街の活力源であり、ヨソモノは街に魅力を感じて集まってくる人達と理解したが、若手人材が育ち先頭に立つ時代である。

商店主の世代交替が進んでいるなかで、今後若手経営者・後継者を育成し、仕掛人・リーダーが登場し、まわりから支持され、若い力の結集が商店街を引っ張っていくという体制づくりが必要であると考える。市民と共に歴史と文化を育ててきた既存商店街を、時代の要求に応える「まち」に再整備するために!!

(協同組合帯屋町筋 理事長)

都市生活者から

笹山 久三

長い間続いた好景気も終わりを告げようとしている。

この好景気が残したものは、いったい何だったのか。それを点検するとき、都市が肥大しながら崩壊に向かっている印象を強くする。

◇

東京の中心部には企業しか存在し得なくなり、過疎化が進んでいることは、大分前から取り沙汰されていたが、好景気の中で起こったバブル現象は、そうした傾向に一層の拍車をかけた。東京から逃げ出してくる人達の需要もあつて、横浜の片すみでも、地価が二倍近くに高騰し、庶民は住宅取得の展望を奪われてしまった。生活者にとっては、深刻な事

態である。

私の友人が、母親を呼び寄せなければならぬ事情を抱えて、部屋の三つあるアパートを借りたが、家賃がなんと十三万円だという。年金生活者になったときのことを考えると、背筋の寒くなるような思いがする。

好景気が残したものは、都市生活者にとっての大きな不安であった。

この流れは、好不況の循環を繰り返しながら、止まることがないだろう。

◇

高知のことを思うとき、一番先に考えるのは、ミニ東京を目指しては絶対にいけないということだ。東京圏と呼ばれているところの生活の最大の特徴は、金を媒体にしなければ

水さえ得られないということである。万事が金だから、現金収入から隔離されれば死ぬほかにはなくなってしまう。

高度経済成長の流れから取り残されることによって、高知には、まだまだ豊かな自然が残っている。

やろうとすれば、水も野菜もエネルギーも、金を使わないで手にすることのできる地域が相当ある。こうした利点を生活に生かせば、稼ぎは少なくなるとも、自然に抱かれている分だけ豊かに暮らせるはずだ。故郷に残った私の同窓生たちは、今でも川と深くかわつて遊びながら暮らしているが、

武家屋敷と日米文化交流

柳生 濟

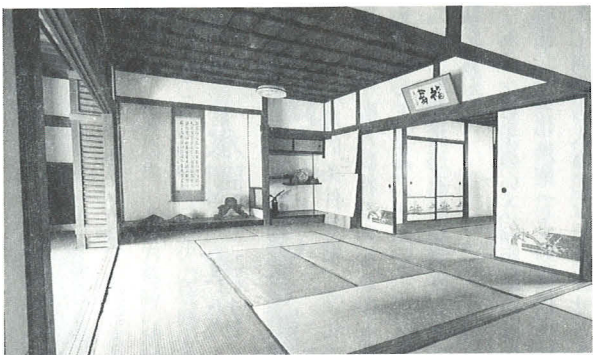
土佐人は、僻地である土佐への反骨からか、昔から新しい物を好む風がある。

個人の家でも、代が替わると、古い建物は未練も惜し気もなく取り壊し、新建材やサッシを使って新世代向きの新築にする場合が多い。

戦後帯屋町筋やその周辺には、災害を免れた武家屋敷がかなりあったが、時代の波には勝てず、歯が抜けるように何時の間にかなくなり、高知市内では大川筋二丁目の旧手嶋家の武家屋敷の遺構のみとなってしまった。

このほかに武家屋敷の建物としては、升形の川崎邸、鷹匠町二丁目の松岡邸がある。川崎邸は、昔は第四小学校の東南隅にあり、名刀匠左行秀の邸宅で建物は重厚、保存状態もよく鍛冶場や、武器、刀の隠し置場

まで保存され武士の心構えが見られた。客間の天井板は羽重、板の側面には金箔が押しであり、豪華な造り



武家屋敷 表座敷

であった。川崎氏と相談の上、この遺構の保存に努力したが、市当局と折合がつかず、現在の升形に移築されたのは残念であった。その後の内部は知らないが、表門は当時の面影をとどめている。

松岡邸は、山内家の山奉行、武田秀山の屋敷であったが、その後松岡氏が譲り受け、現在復元工事中である。内部には桂棚風の三重の違棚や床脇の狝潜等細部に亘り見事な細工が施され一級品の建物である。

三翠園の山内家下屋敷の武家長屋(国重文)に対して、現在の大川筋武家屋敷は二百石馬廻役の屋敷であり、敷地約九百平方メートル、建物延約二百平方メートル余の規模であるが、全国的にみてこの階級としてはあまり例がない。

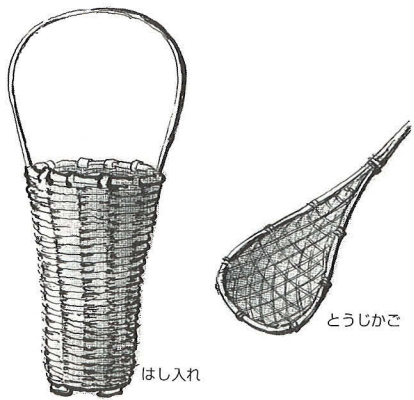
城下町の一角にあるこの長屋門は、木割が大きく、南国土佐の荒々しい気風を如実に現し、飾り気なく質実剛健で、堂々たる建物である。内庭には樹齢二百年以上と思われる、幹の根元は直径一メートル余もある大蘇鉄があり、書院造の母屋と共に重要な個所は幸にも健在、一昨年七月高知市が依頼した調査では、棟札の未発見や建物の一部の改修をあげて建物復元後を考慮に入れた文化財としての真の価値を見出す調査できなかったのは、まことに遺憾であるが、

羨ましい限りである。商品社会だから、金がいらぬという訳ではない。都市から買うだけでなく、売る産業をどう興していくかということが重要だ。

◇

帰郷したさい、竹細工のグループの話を知りたり、無農薬野菜の話を知りたりした。いろんな努力がすでに起こっている。自然とか天然とかいうものが、都市では高級化しはじめている。それを生かした産業を、どう体系的組織的に発展させていくかという課題は、行政のものである。

(作家)



無名の名刀でも国宝に指定されている。

ロバーツ助教と小生との出会いは長屋門に三十数年住む山本延子さんが、その明け渡しを相続人から要求された三日後(平成元年十一月八日)、米国人のロバーツさんを連れてきたことによる。会ってみると、武家屋敷の保存に関するものであり小生と同意見で共鳴し合い、日米協同としての保存運動の約束をしたが、後日の事情で運動推進の大役まで引き受けざるをえない結果となった。

高知市内には「〇〇跡、地」の碑は多いが実物は少なく、他県に比べ肩身がせまいことである。市内最後の遺構となったこの屋敷は、歴史、観光の点からしても、その稀少価値は大であるが、市民の総力をあげての御協力がなくては保存目的の貫徹は至難である。

米国のジャンセン教授(ロバーツ助教の恩師)、ブラウン助教、また保存運動の基金にと、毎月五〇ドルを送金してくるロバーツ助教の声援と期待にこたえることこそ、真の日米親善であり文化交流の草分けにもなる。この運動が県市民の次の世代への良き贈物となることを確信する。

(大川筋武家屋敷保存会会長)

二酔人間答

永國 淳哉

斎藤茂太さんが会長をつとめる日本旅行作家協会の仲間入りをさせてもらった。

その会の先輩が「文化とは」と、独特の定義を持ち出してきた。太平洋上、酒を酌み交しながらのことである。

「世界中の人々が真似すれば文明となる。特定の地域に温存しているのが文化」

万次郎が驚いたナイフ、フォークやジーパンは、今や何処の国でも使っている。これらは文明だという。西洋人は、文明をつくる天才だといふ。

いっぽう振り袖、羽織袴は日本だけ。だから日本文化というのが、漬物、みそ汁の朝食も、他国の食卓に伝播しそうにないので、立派な大和文化だといふ。

「だから土佐には文化がある」ときた。

——無策から有策の時代へ——

「土佐は山と海に囲まれ、他に伝播

し難い地理的条件完備。文化の宝庫」と、酔人独特のストレート論理を展開してくる。

「ところが高速道路が完成した」と、目をすえた。

トインビーのいう「距離の破壊の時代」。文化無策でよい時代は終わり、高知も人為的な策を弄せざるを得ない有策の時代に入ったと云う。

「でもね。今までの無策の勝利というか、文化行政の遅れで、土佐の高知には庶民文化、遍路文化などの中に実にユニークなものが一杯残っている」と、云いたい放題。

「特に幕末の庶民文化。絵金の芝居絵が、土佐から発表された時、日本文化の評価基準まで変えたよ。八波直則という先生なんて凄いな」

自称龍馬フアンの酔人は、やはり高知好き。しかも詳しい。

「しかし、八波先生も紀貫之も土佐人ではなかった」

少し酔いがまわってきたようだ。

こんな習慣は嫌われることはあっても、これで親交が深まるわけがないと拒否してきた。

「でもなあ。まだ、献盃反対なんて、こんな熟さない提案。まだ高知でするなよ。必ず足を引っ張られるよ。嫌われるよ」

「まだ禁煙も熟してないですね」

「そうか。自称文化人が、高知ではまだタバコを喫っているのか」

先輩酔人は腕組みした。

「ネプトを知ってるか。膿が溜まるまで、押すと痛いイタイ。押すだけ損。よけいに腫れるだけ」

そして、高知の「文化のネプト」は、まだ腫れてないのかと、ため息をついた。

「ネプトは、敵に押させよ。先輩あたりが押してくれませんか」

「俺は駄目。いいか現代文化人は次の三要素が必須、

- (一) 古文書の読解能力
- (二) 外国語原書、月一冊以上読破の習慣
- (三) ドクシン

「ドクシンでないと文化人でないのですか」

「独身でなく、独慎。この独慎の現

連の催しを行った理由である。

講座「土佐ことば」は土佐方言研究の第一人者、土居重俊氏に六回にわたって土佐方言の概略についてお話しいただいた。

「土佐ことは専科」は言語学、民俗学、現代詩など様々な分野の五人の方に、それぞれの立場から土佐方言について語っていた

頑張れ！土佐弁

だき、興味深い講義となった。

「ことばは劇場」は土佐の民話の語りや紙芝居、作者自身による方言詩の朗読、土佐落語などを盛り込んだ二時間程度の公演である。二回開催したが、何れも百人を越える方々にご覧いただき好評を得た。

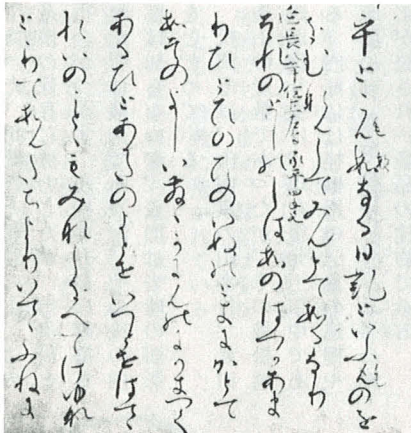
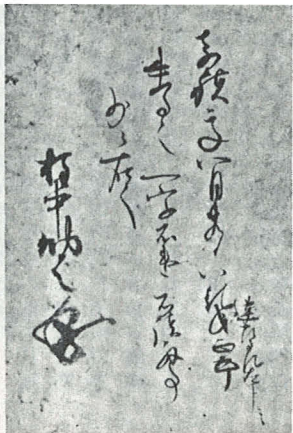
大家賢三

れないものこそ、方言の価値ではないかと実感させられた。また「子ども達にぜひ聴かせてやりたい」「学校で方言の取り組み」などの意見もあり、次の世代へどのように言葉を伝えていくのかを考えねばならぬ時期にきていると思った。

「いいか。土佐日記を書いたのは土佐人でない。でも、それを大切にする義務は土佐人にある。」

ところが土佐日記の藤原為家自筆本。幻の紀貫之原本からの写筆本。

昭和六十一年に国の重要文化財に指定された為家自筆本を、東京神田の古書商が七千五百万円で売りに出した。日本中が高知県に入手保存を願う、作家仲間も一番に高知に知らせた。それを、金が無いと云って断つておきながら龍馬記念館に七千万円の



藤原為家自筆土佐日記
巻首・奥書（「土佐日記」校注・現代語訳 川瀬一馬より）

純金カツオ。それも、高知県文化基金とかいうもので買ったというじゃねえか。日本国中笑っているが、俺は高知が好き、龍馬が好きだから腹が立つ。

貧乏無策のお蔭で温存されてきた高知文化に、金の有策。高知に文化施設がほとんど建設されているらしいが、成金趣味以下の低級文化、他地方の物真似文化、中央崇拜文化の殿堂を造る気かよ。龍馬が泣くよ」

どうも田舎者扱いされているように腹立たしいが、龍馬になつてじつと聞く。

「貧乏鬼が、遅れて金持ちの真似してもしかたがないよ。個性。個性。高知にしかない文化を生かせよ。育てよ。高知の空の下でないとだめな文化を大切にしろよ」

——ネプトの腫れ——

調子づいてきた先輩酔人に「まあ一杯」と、自前の盃を差し出した。

「土佐のケンパイ。これを俺は文化と認めない」ときた。

原点は、ヤクザのオナガレ頂戴から来た献盃なのか、まったく健益でない怒りだした。国際化時代の現代、

代的象徴が禁煙。タバコをプカプカ喫って、その上肥満。どうしようもないね」

「タバコを止めたが、私もこの腹だけはダメですね。飢餓体験に基づく、勿体ない精神があるから」

これまた太り過ぎの先輩酔人も

「俺もそう言い訳してきたが、やはりセルフ・コントロールすなわち独慎ができないダメ男だよ」と、腹をポンと叩いた。

昔は、書画、篆刻それに歌、詩をこなせば文化人。出腹も太っ腹。ところが文化地方発信時代・国際

アンケートをみると「古い土佐弁の優しさ、温かさを感じた」「土佐弁は情感を伴った言葉であると思った」など、土佐弁の良さを再認識する意見が多かった。方言の意味を共通語で説明することはできても、方言の持つ独特の情感やニュアンスを伝えることはむづかしい。共通語に置き換えら

さて日本全国で「めだか」の方言は四千数百種もあるそうだが、この豊富こそ方言の命である。今後、全国的に均一化・同質化が進むなかで、言葉のパターン化あるいは思考のパターン化も進むであろう。そんな中で方言は地域のアイデンティティーとして、また地域文化を豊かにするものとしてますます重要な役割を果たしていくものと思われる。まだまだ試行錯誤ではあるが、これからも土佐弁にこだわって、多くの人に「聴いてよかった」といわれるような催しを開いていきたい。そして心を豊かにしてくれる土佐弁に「頑張れ！」とエールを送りたい。どうか皆さんのまわりにいる語り部の方々や、方言に関する面白い話題などをお知らせ願えればと思う。

先祖まつり (三)

依光 裕

高知市の西郊にあたる本宮町と上本宮町に古くから住む「河野氏」一族のルーツは、瀬戸内海と海賊という事になっており、春秋の二回、先祖まつりを行っている。

先祖まつりは「何家」の場合でも、世話役の当屋以外各家の世帯主か、その家の長老が一名参加することになっていられるらしい。私の場合「河野」から「依光」に姓を変えたが、息子が旧姓を継ぎ、その世帯主であるために参加の資格を認められている。

以来、二十余年を経たが、この間に「河野先祖」のまつりは少しずつサマ変わりをした。まず、何人もの長老が先祖の仲間入りをし、そのたびに、祠の前で酒を酌み交わす子孫の顔ぶれが変わった。

これは世代の交替ゆえに仕方ないことだが、明治中期にこの世に生まれた長老の存在は、酒の肴に幕末から昭和に至る『周辺のエピソード』

を語って貴重だった。

「河野先祖」のまつりの日、一族の長老たちは語った―。

杓田には紅水川と江ノ口用水が流れちよって、そのどれもが江ノ口川の上流になる。

※ 杓田・高知市の西郊、現在の市立高知商業高校の周辺。

川沿いに住む者は、それも川の上流に住む者は下流に対して責任を持たないかん。そうせんと川は汚れて死ぬるのう。

昔から「水に流がす」という言葉があるように、川というもんは至って便利で、チリでもアクタでもポイと流したら、スーッと流してくれる。そこで上流に住む人間の責任が重

うなってくる。

上流の人間が一本のチリを流すと、そのじき下流の人間は「上流の者が一本流したきに、俺も一本ならかまうまい」と一本流す。二本になる。そうすると、その次の下流の人間は「二本ならかまうまい」と二本流す。四本になる。

次の人間は四本、その次は八本、十六本、三十二本と倍々流しになるきに、川は下流へ行くほど汚れる理屈よ。

こりや浦戸湾で投網を打つと、よく分かる。昔と違うて、今の浦戸湾の底はヘドロと飲み物の空き缶だらけじゃ。

浦戸湾を汚した犯人は「高知パルブジャ」というてうどみゆが、犯人は他にも居りやせんか。

飲み物の空き缶を最初に上流の一人が一個川へ捨てて、それが倍々流して下流へ流すとして、三十人目になつたら空き缶の数はなんぼになるのうのう。

誰ぞ今度の「先祖祭り」の日までに、計算しちよいたや。

※ 十八人目・五百十二個

二十人目・五十二万四千二百

八十八個。

三十人目・五十三億六千八百

七十九万九百十二個。

川が汚れてからこち、シバテンもカワウソも居らんかったが、シバテンの話をしてみるうかのう。

シバテンというもな相撲が好きで「こりや、オンチャン、相撲とらう」いうて出てくる。こんまいさうなのう。子供みたいな男じゃというた。シバテンというもな居らんというけん、居つたにかあらん―というのう。

宗安寺の人は川上の不動様のお祭りの日には、親類の人を集めて宴会をするに、朝暗いうちに雑魚場へ魚を買いに行くじゃ。

その宗安寺の人が鏡川沿いに堤防の竹藪道を歩いて雑魚場へ行きよつたら、杓田の河原の手前で「相撲とらう」いうて出てきたきに、「ヤカマシイノ」というもんで。ひつとこまえちよって放つて行たさうな。

その後が遅れて来よつたところが、杓田の河原の藪になつたところで話声が聞こえる。

「オンシャー、いくもんか。アレの頭にや神が宿つちゆうきに、オンシがなんぼ相撲をとつて勝とうち、いかんぞ」

こう言いゆ声を聞いて、弟は雑魚場へ行たさうな。それから魚を買い戻りにのう。「兄、オマヤ、杓田の河原で何ぞ居りやせざつたか」

昭和二十年頃までの上本宮町は、この江ノ口用水の流れを水車で汲み上げて水田を拓き、その後背に三十数戸の民家が点在する集落としてあつた。

晩冬の日、江ノ口用水は川干しをされ、下知地区の農民の出役による川浚えが行われた。江ノ口用水は



本宮町・上本宮町を望む

下知地区の農業用水でもあつた。川底のあちこちにできた水溜りに、ウナギ、ナマズ、フナ、エビなどが集まり、子供たちは歓声をあげて手づかみにした。春の江ノ口用水は堤防の桜並木が舞い散らす花弁を浮かべて青く流れ、初夏には乱舞する螢火を妖しく反映

する宵闇を蒼く演出していた。下知地区の水田が宅地となり、三十数戸の上本宮町が七百四十五世帯余と市街化したいま、そこを流れる江ノ口用水は川幅の半分が道路拡幅のために暗渠となり、鏡川からの分水に生活廃水を合わせ、それでもハヤなどの小魚を残して泳がせている。江ノ口用水に乱舞する螢火を妖しく反映する過去があつたことを知らない人は、その流域に「螢橋」の名のつく橋のあることを思い起こして欲しい。

土佐の海は碧

土佐の空は青

そして清流 鏡川

眼を閉じてみよう

心の奥に聴こえる祖先の囁き

土佐の海は碧く

土佐の空は青いか

鏡川は いまも鏡の川か

美しい自然 ゆたかな心

フェスティバル土佐 鏡川まつり

ここにひらく

(RKC高知放送企画事業局長)

土居重俊監修 高知市文化振興事業団編 土佐弁 土佐日記 岡井清水著	B6判 二〇〇頁 定価一、〇〇〇円
岡井清水著 高知県文学散歩 高知の文化を考える会編	四六判 二七八頁 定価一、八〇〇円
高知の文化を考える会編 高知の文化を考える 高知市文化振興事業団編	A5判 一八八頁 定価一、二〇〇円
高知県緑の環境会議森林研究会編 わがまち百景 高知の森	A5変 二三四頁 定価一、二〇〇円
筒井広道著 画帳の歳月 上森千秋著	A5変 二五六頁 定価一、〇〇〇円
土居重俊著 流れと波の科学 土佐日記 全訳注	A5判 二四〇頁 定価一、五〇〇円
土居重俊著 高知県方言辞典 高木啓夫著	A5判 一一八頁 定価一、八〇〇円
高木啓夫著 土佐の芸能 清水孝之著	B5変 二四六頁 定価四、八〇〇円
清水孝之著 中山高陽 外崎光広編	A5判 三三六頁 定価三、八〇〇円
外崎光広編 土佐自由民権資料集 大谷英二著(高知レポート1)	A5判 三四四頁 定価三、〇〇〇円
大谷英二著(高知レポート2) 明日を創る 今井嘉彦著(高知レポート3)	A5判 二二六頁 定価一、〇〇〇円
今井嘉彦著(高知レポート4) 土佐の自由民権運動 外崎光広著(高知レポート4)	A5判 一〇八頁 定価一、〇〇〇円
外崎光広著(高知レポート4) 土佐の自由民権運動	A5判 一五六頁 定価一、〇〇〇円

*は税抜き価格です

お申し込みは最寄の書店か事業団まで

猫 帰る

土田 京子

正月、子どものいない長女が猫をつれて帰って来た。名前をビヤードという。

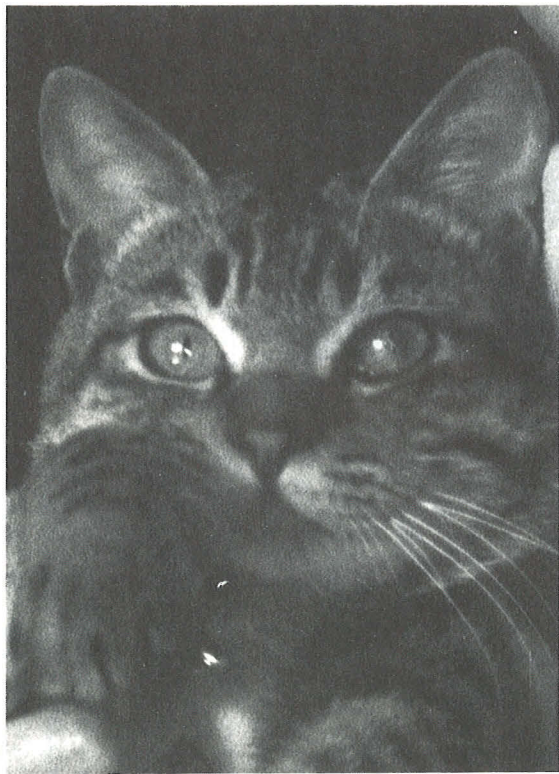
猫に関しては前から電話で沢山の情報が入っていた。

目が猫並はずれて大きく、鼻すじが通って、それは可愛いということ、二週間行方知れずになり動物探偵にまで依頼したこと、それでも見付からなかったのに、同じ町に住む末娘が偶然にも駅前を探し出したこと、その間の長女の嘆きと、よろこび、すっかりノラ猫風になったビヤードの話など、など。

動物好きの私は、その情報だけで早くも情が移り、早く会いたい一心で待ち、夫は、我家に猫がいなくなって以来、横暴をきわめて跋扈している鼠に一矢報いんがための下心で猫を歓迎しました。

「ビヤード、おばあちゃんだよ」「？」
タヌキのようにふくらんだ猫が私の腕の中へ、「ビヤード、これ？ あら、まあ！ おでぶ、でも……」とか言っ
ての初対面。

正月の、のどかな午後、開け放した二階の窓から屋根を見つめていたビヤードが思い切って足を屋根にふみ出しました。



「ビヤード」

が、すぐにマンシヨンの手すりとの違いを悟り引きかえします。危険を冒そうとはしません。

一日二回の健康猫食とかを食べ、テーブルにある正月料理に口一つつけない行儀を身につけ、主人の首つたまにだけ抱きついて甘え、マンシヨンは「ニャオー」の声もあげません。

「都会の猫は違うね」「鼠もこわがりよらへん」夫は撫然として天井を見上げます。ガリガリという何やら囁る音は相変わらずです。

「よし、こうなったら本格的に鼠対策考えんならん」と夫は座布団蹴って書斎へ、私は一人ブツブツ「何がビヤードちゃんね、だ。私にはちよつとも甘えへん。おばあちゃん？ 私が!! デブ猫の!!」

期待はずれの、思惑はずれで夫婦の胸中は収まりません。

数日居て、猫は穴のあいたトランクにおとなしくおさまって飛行機で東京へと帰りました。

猫のペット化と一口に言ってしまうといいのか。「思考」を持たないと思っていた猫が「安住」の打算をするのでしょうか、鼠の存在も気にならず、魚の臭いも嗅ごうとしない猫、こんな変動は私には不気味です。

(「雲母」同人)

ポリクロスアート'91を見て

高橋 亨

本誌四二号で、私は存じ上げないが高新企業事務局の谷是さんが「香川県から見た土佐」という副題のもとに、香川県とくに高松と比較しながら高知の文化を論じておられるのを興味をもって読んだ。高松では文化をめぐむ環境づくりがほとんどすすめられているのにたいし、高知は文化施設に乏しく、土佐人の生活は酒や遊びに傾きすぎていると嘆かされているのだが、私はなるほどそうかと思う反面、それでも高知は私にはおもしろい。そうでもないところもありますよと言いたくなかった。ポリクロスアート展というのがありますよ。

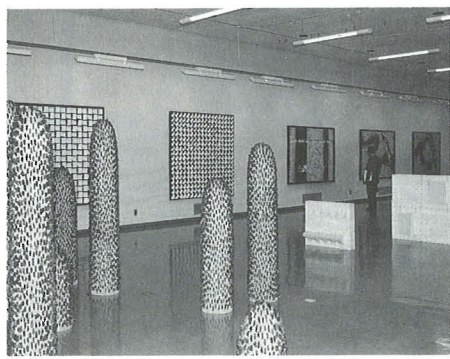
私は神戸や大阪に住みながら、京阪神ときには東京の展覧会を長年見つけてきた。そういうなかで知るようになった高知の作家が何人かおり、私がつとめる大学を出て高知でがんばっている作家もいる。それについて香川ないし高松にはなるほ

ど作家は多いようだが、私が関心をもつ現代美術の分野ではあまり知らない。高知のヤングのファクションは東京直結だと土佐人のひとりに聞いたことがあるが、高知の現代美術の作家は大阪や京都にも進出する。

そういう高知の作家が各地に呼びかけ、総勢二十人あまりで開いたのがこのポリクロスアート'91である。高知の作家が半数をしめるが、香川や愛媛、さらには大阪や奈良からも参加した。ニューヨーク在住の日本人作家、高知滞在中の外国人作家も出品した。私は第一回展も見ることができたが、今回はより充実した印象を受けたのは、展示室の壁がきれいになったせいだけではなさそうだ。

現代の美術はますます多様化がすすんでいる。一九五〇年代以後さまざまな傾向が登場してきたが、現在ではある特定の方向にむかって流れるという現象はみられなくなり、時代様式的な特色をあげることが困難

になっている。むしろそういった特色のないことが特色といわねばならなくなつた。ポリクロス―多極交差というこの展覧会のスタイルも、そうした現代美術における多様化をふ



ポリクロスアート'91から

まえてのことだろうと思われる。そういう状況のもとでは、このような多数数の作品展についての感想をのべるには厄介なことになる。全体についてどうのこうのというより、ひ

とつひとつの作品を語る事が重要であるからだ。

美術における多様化は表現形式とか作品形態がいろいろ、ばらばらということにとどまらない。キャンパスの上での描きかたがさまざま、石による形がそれぞれ変化に富んでいるということだけではない。技法や使用する素材の面でも同様である。この展示でも油彩や木や石はもちろんのこと写真や金属、紙、繊維、いろんな合成樹脂系材料などが目についたが、その他数えあげればまだまだあるだろう。ありとあらゆるものが各自の考えにしたがって駆使されている。全体を筋道たてて語ることはいつそう困難になるわけだ。

ところでなぜそのように多様化がすすむのかを考える必要がある。いまの状況をあらゆる傾向が出つた結果だとか、行き詰まりとか低迷とかと考えられがちだが、そんな消極的なとらえかたをするべきではないと思われる。多様化とは作家がそれぞれの自由へ向かう姿の総体ではないか。美術のいわゆる文脈にも流行にも、国にも地域にも束縛されない自由。作家というものは自由の実現へ最高の可能性を与えられた人種ではないかと、羨みながらポリクロスアートを見た。

(大阪芸術大学教授)

土讃線とその周辺

岡林 清水

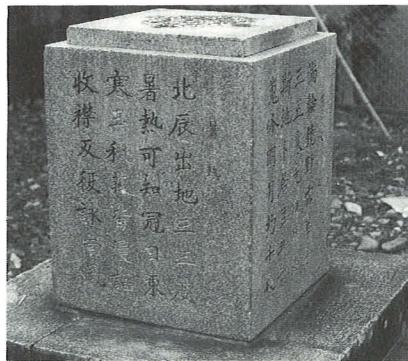
土佐は「とさ」であって「どさ」ではないのだが、土讃線は「どさんせん」であって「とさんせん」ではない。讃岐(香川県)の多度津から土佐(高知県)の窪川に至る百九十八・九キロのJR線を土讃線というのだが、これは全く、土をくぐり山を縫うて走る「トンネル線」である。「土山線」といえるかもしれない。大歩危・小歩危の景観も、数多くのトンネルで、十分落ち着いて鑑賞できない間に、列車は県境を越え、さらに山峡に沿って山深く入って行く。「国境の長いトンネルを抜ける」と山国であった」の感を深くする頃、列車は豊永・大田口を過ぎて大杉駅に着く。

三十八年ぶりに高知へ帰ることになった大町桂月は、大正七年(一九一八)五月十三日に、大田口の豊楽寺の薬師堂をみて、大杉で一泊した。翌十四日、八坂神社境内の「女夫」の大杉を仰ぎ「實に天下の大杉也」(「三十八年ぶりの故郷」と感嘆したのち、本山へ回り、帰全山で野中兼山の母堂方の墓に詣でたりしてから、高知へ向かった。

山峡のトンネルをくぐりにくぐって、やっと前方に高知平野が見え始めた頃、列車は一気に下って土佐山田駅に着く。駅に降りて驚くのだが、風の強い町である。

現代文学に新風を吹き送った「バルタイ」の倉橋由美子も土佐山田町東町の出身である。

土佐山田駅を過ぎると、車中放送で「次は、ごめん、ごめん」と連呼するが、これは何も謝っているのではない。土佐山田駅の次は、後免という駅である。駅の南方に広がる後免町は、もと御免と書き、元祿の頃後面、今は後免である。地名の由来



谷 秦山詩碑 土佐山田町

この町の秦山町には、かつて土佐藩学に南学の疾風を吹きこみ、晩年塾居を仰せつかった谷秦山の邸址があり、「暑熱」「甲午除夜」「仲秋」の漢詩が三面に刻まれた碑が建っている。町の北方ぐいみ谷には、秦山の墓があるが、入試の季節には、背の低い秦山の墓石を覆って、合格祈願の数十本の日の丸の旗が、風にはためいている。

は、野中兼山が当地を開拓するに当たり、年貢ならびに諸役を免除したことによる(参照・緒方宗哲「土佐州郡志」)。

後免駅を離れると、十分で高知駅に着く。高知県庁所在地で人口三十万を超える高知市の玄関口にしては、ちっぽけな駅である。高知駅前から南へ真っ直ぐ、土佐電鉄のかわいいう電車が軌道を走り、はりまや橋で、後免・伊野間を結ぶ東西線と交差している。この「土電」は土佐の風物詩といえよう。

高知駅から旭駅・朝倉駅を過ぎれば、五、六分で伊野町にかかる。伊野の大国さんで知られる「神の町」であり、土佐紙製造で知られる「紙の町」である。根本神社境内には、高濱虚子の「紙を漉く女のかざす珊瑚かな」の句碑が建っている。

仁淀川の鉄橋を渡ると十数分で佐川駅だが、ここは藩政時代から文教の盛んな土地で、数多くの文人を輩出し、桜と共に香気をのこしている。

斗賀野トンネルをくぐると、列車は須崎湾へ向かって山を下り始める。寺田寅彦は、明治三十四年の頃須崎で、約一カ年療養生活(「高知がへり」嵐)を送ったが、オペラ「純信お馬」の主人公お馬さんも、高知から須崎に移り住み、のち東京で没した人であった。

(高知大学名誉教授)



手漉き紙にひかれて

ロギール・アウテンボガルト

私はオランダのハーグ市の出身です。オランダでは三番目に多い人口を持つハーグ市は、国際裁判所が有って有名ですが、政府の機関も集中する静かなまちです。

隣接するまちには海があり、夏は高速道路で二〜三時間のドイツから沢山の海水浴客が訪れます。

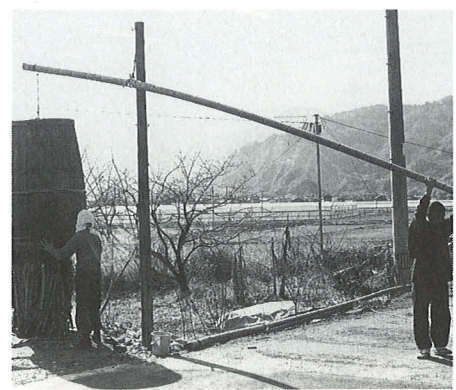
グラフィックデザイナーの学校を卒業し、製本の会社に勤めるかわら美術学校に学んでいましたが、この時初めて日本の紙と出合いました。丁度その頃、日本を旅した人の書いた旅行記を見たり、ラジオで日本の音楽を聞き、もういてもたってもいられず、一九八〇年十月末シベリア鉄道経由で日本にやって来ました。日本の紙のことに興味をいだいていましたので、まず東京では全国の紙漉きのリスト、地域の地図を集めました。そして福井、鳥取、島根、沖縄など各地を次々とまわり、紙のまち伊野を訪ねて高知にやって来たのは、一九八一年の春だったと思います。

最初、高知市内の紙業試験場で勉強させてもらったのがとてもうれしく、心に残っています。

初めて見る日本の自然、特に紙の原料を生み出し、四季の移り変わりのある山が好きで、伊野町の中追で生活することにしました。

現在は仁淀川のほとり伊野町八田で、手漉き紙の製作に取り組んでいます。原料は自分で育てるからできるだけ近くのものを使い、手漉きのやり方は中国、ネパール、タイ、またヨーロッパのやり方も勉強した自分流のもので、土佐和紙というより手漉き紙をつくっているという方がよいと思います。

私は原料を植え、収穫し、良い水を探し、そのプロセスを大切にしています。より早く、より沢山の生産は機械生産となり、より多くの世界の木を切り倒し、環境を破壊している



ここでは紙の原料となるミツマタコウゾ、桑の栽培から田畑をつくることまで習い、そして伊野のまちに出向いては紙を漉き、日本の生活・文化の中に馴染んでいきました。

紙がなければ今の文化はこわれませんが、紙をつくるやり方も大切にしたい。

また、紙を漉くとき、水にねばりをもたすのに黄蘗の根を使います。大量処理をする場合防腐剤を使用しますが、最近、私は黄蘗の根を土にいけ、使用する分量だけ取り出し、この薬を使用しない方法をとっています。環境問題のことを考えたからです。

この他、ドウネリの葉、ピナンカズラの蔓や葉なども使います。

こうして、私は紙漉きのプロセスの中で、エコロジーの勉強もしているといえます。

現在手づくりの手漉き紙と、野山から採れる藤葛などを組み合わせ、日本の暮らしにマッチした照明器具づくりに力を入れています。今のやり方をどんどん深めていきたいと思っています。

中追の山の中から始まった高知の生活は、まわりの人達に随分と助けられました。

高知には素晴らしい自然という財産が残っています。これらは、皆で大切に守って欲しい。

南の海も受け、青い空、明るい雲、困気のある高知は、今も大好きです。

(紙工芸家)

県下初の文学館

本山町立大原富枝文学館

やや密集した本山の家並みを北に抜けると、白一色で統一された西洋風の清楚な建物が目に入る。

現役作家の文学館は全国的にも珍らしいとされるが、東京都在住で、なお精力的な執筆活動を続けている大原富枝をたたえる「文学館」は、昨年十一月二十五日にオープンした。ここから望む吉野川対岸には帰全山公園、そしてその後方には嶺北の山々が続く。

大原富枝は、この文学館から少し上流の対岸にある寺家に、大正元年に生まれている。

旧裁判所を改修した建物はコ型の配置で、周辺は植栽で落ち着いた雰囲気をも出し、内庭には大原さん希望の茶室がある。

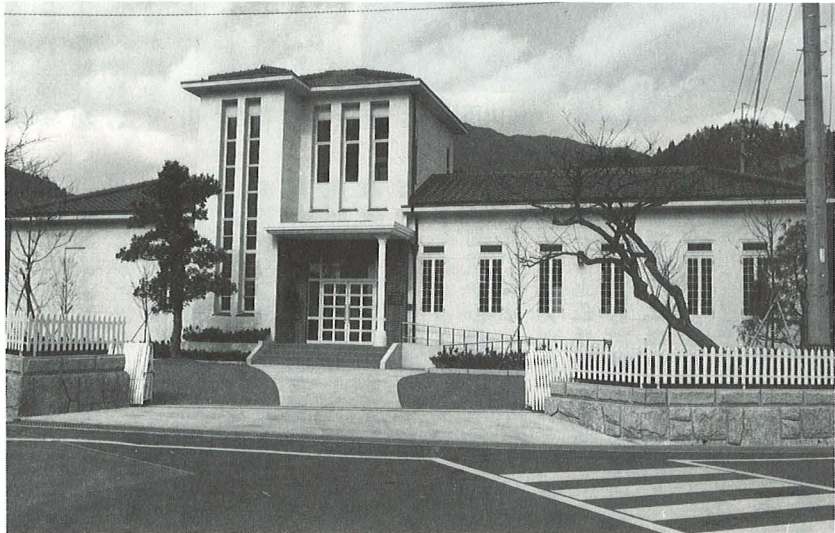
玄関左に面するところに展示室が設けられており、その正面には「故郷の流れ」と題した書が目に入る。「寺家の家の門口には、みやまの

の手紙などが展示され、文学界との幅広い交流を物語っている。
この他、一七〇四年(宝永一)二月三日のものと推定される「谷泰山に宛てた婉の手紙」や、「山崎闇齋直筆の書」、また、当時としては高価とされた富枝の母の形見「蛭籠」なども、目を楽しませてくれる。

展示室入口手前を二階に上がると研修室があり、ここでは会合や各種活動が行われているが、将来はこの場所を使った館独自の企画ものを、打ち出したい意向である。

企画物といえは、文学館の開館を記念し、町、教育委員会、そしてこの文学館が主催して大原富枝文学賞を設置、現在第一回の募集が行われている。

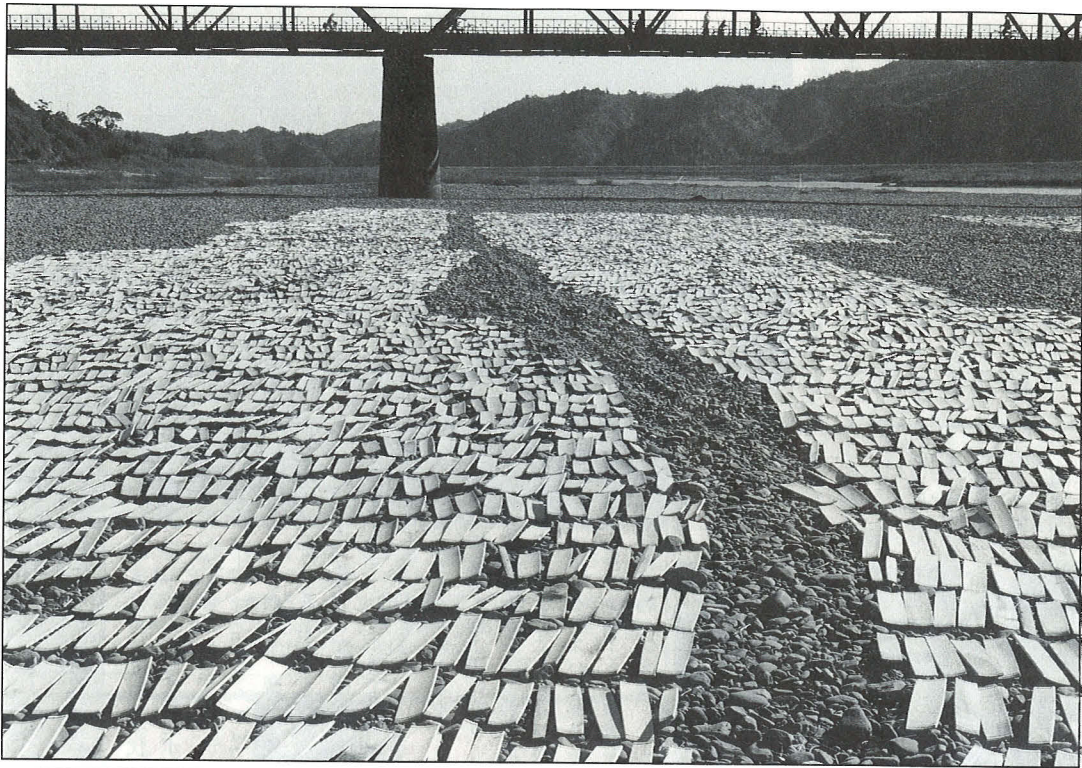
オープン以来静かなブームをよび、平日で約三十名、休日には百名近い入館者が訪れている。県外をふくめ町外からの見学者も多いようだが、案外に地元のものはいつでもいっつもも行けると思っている。



本山町立大原富枝文学館

るのかも知れない。
今後、展示室の拡張整備なども計画、内容の充実にも力を入れるが、隣接している同じ町立プラチナセンター(四一席の文化ホールなどもつ)とともに、嶺北の地における素晴らしい取り組みと、文化施設の充実ぶりを目の当たりに見た。

第7回高知の映像コンテスト入賞作品



高知を撮る

樽板干し

宮地一栄

織田信長の居城安土城のなかで、兵士に食事を配ることを「配当」を弁するの意味で「弁当」といった。これが弁当という言葉のはじまりだという説がある。

実際の弁当の歴史はもっと古く、平安時代に宮中や貴族の邸宅で饗宴のある際、下級の人の出した強飯のむすびを「屯食」または「つみ飯」と称していたのが弁当の前身と言われる。これが武家政治以後、軍糧や携帯食として普及していったのが、どうやら弁当のルーツらしい。

こうした弁当が、行楽弁当として多彩になるのは江戸中期以降で、桜見物の「花見弁当」、芝居の幕合いに食べる「幕の内弁当」など、中身に工夫がこらされ、ご馳走の一種になる。

だが、日常の弁当の中身は、決して豊かでなく、質素を絵に描いたようなものでしかなかった。筆者の小学生のころの遠足の弁当は、握り飯に竹輪や

弁当



風俗歳時記

卵焼きを添えたものが上等の類だった。焼いたにぎり飯はなんともこぼれなくて、おいしかったし、竹輪や卵焼きがご馳走であったことは、今日の飽食の生活に慣れた人々には想像がつかない。結構ハレの弁当だと思っていた。日本人は、弁当好きな民族だろうか。

全国いたるところでその土地自慢の弁当が売られているし、駅弁にしても日本中で一、八〇〇種もあるという。いまでは職場に弁当を持っていく人はめっきり少なくなってきたが、かつて「腰弁」は、几帳面なホワイト・カラー文化の象徴だった。さて、現在の若い母親は、弁当は外に持って行って食べるものでなく、家を買ってきて食べるものだと思うているらしい。「今夜は、夕食をつくるのが面倒だから、弁当にしようね」と、一家で「〇〇弁当」を買ってきて食べるというのだ。食生活に対する人々の思いが、時代とともに変化していくことは仕方ないとしても、弁当もここまで来たかの感が深い。

(晋)

明るさとさわやかさで

野村 栄一

「悲しみに出会うたび、あの人を思い出す。そんな時そばにいて肩をだいて欲しい」とは、中村雅俊のふれあいの一節ですが、ともすると、暗くなりがちな療養生活に少しでも明るさを、又、院内をスカッと吹き抜けるさわやかな風のような院内報をという、院長の肝入りで昭和五十三年七月から始まった私達の「ふれあい」ですが、本年一月で教えて三三号となりました。



前任者が元新聞社のOBということで一年半前に私が引き継いだときには、ずいぶんとブレッシャーがかかりましたが、素人なりに自分のカラーが出せればいいのだという開き直りで今日に至っています。発行は、正月、四月の年度替わり、病院の創立月である九月の年三回ですが、これをしだすと、締切のくるのが早いこと、早いこと。広報のスタッフと「この

楽しい音楽 ブルーグラス

秋沢 大助

ブルーグラスは、一九四〇年代にアメリカのケンタッキーで生まれたポピュラー音楽のジャンルの一つです。バンジョーやマンドリン、フィドル(バイオリン)などの「生」楽器を使ってアメリカ民謡などを演奏するスタイルで、素材で軽快なリズムが特徴です。おそろく映画やコマーシャル等で既にお馴染みの音楽だと思えます。

私たち「ザ・シュガーヒルランブラーズ」は、結成して約十年になり、その間メンバーの変動やバンド名の変更(テルボーイズ)等ありましたが、高知では数少ないブルーグラスバンドとして、各種イベントやコンサートで演奏しています。また私たちのバンドは、ハーモニーを重視しながら、従来よりブルーグラスとして演奏されてきた曲以外にも、誰でも知っている曲(S&G やビート ルズ等)



文化の伝承を

小藪 忠

平成三年四月、高知市文化祭の開幕行事に土佐特別大歌舞伎が市民参加で演じられ、歌舞伎の愛好者の好評を得ました。義太夫の竹本一長師、振付けの中村和子師、両人は立派なプロですが、その他は素人ばかりで、日本舞踊の先生方が主になっての歌舞伎芝居でした。



終演後、今回限りでは残念だから来年も自分達でと、新しく土佐歌舞伎伝承会の発足となりました。昔は、土佐は芝居王国と言われる位プロ・素人の役者がいましたが、これから先々若い人を中心にして、どの位の事ができるか、昔の人の残してくれた文化の伝承をできる限りやってみたいと思います。現在、会員は裏方さんも含めて三十名になりました。各人仕事、職場も違いますので、練習も毎日ではありません。今のところ週一回

社会の姿容に対応し

吉永 小糸

潮江婦人学級は、昭和三十三年に結成されました。

昭和三十六年に高知市二番目の分館として潮江図書館ができましたが、当時戦後の経済成長と共に共稼ぎ家庭のカギツ子問題がおこりました。図書館で子供さんの世話をしようという計画を進めていましたが、日増しに交通量の多くなる棧橋通りでしたからそれを心配して、対象を子供さんからお母さんに変えて婦人学級となりました。当時、市内ではこうした婦人学級はなく、市街地では育つまい、どうせ線香花火よと言われたものでしたが、現在の会員数、百数十名を数えます。これは戦後社会の急激な姿容にたいし、時代を極めていこうとする婦人の学習の場とし輪を広げて来たからです。時には学級の増加で図書館では入り切らず、銀行、農協、青年センターと会場も借りました。建物が老朽し



間発行したと思ったら、またか」などとぐちをいったりしています。しかし、この院内報を心待ちにしておられる患者さんや、その家族の方々のことを思うとそうも言っておられません。できるだけ分かりやすい文章と、登場者と写真を多くいうことをモットーに、当面は、五〇号を目指して頑張ります。ことしの主役は申ですが、朝倉病院の主業は「ふれあい」です。

連絡先 高知市朝倉内一六五三一―二二 朝倉病院内 電話 〇八八八―四四―二七〇一

もアレンジして演奏し、誰でも楽しめるステージを心がけています。聴いてみると、とても速く難しそうに感じるかもしれませんが、やってみると意外と簡単な楽器ばかりです。電気を使用しないためどこでも楽しめる、しかも自然の中にとけ込み、とても楽しい気分させてくれる音楽だと思えます。

この「誰でもどこでも」楽しめるブルーグラスをやってみてみたい方、一度聴いてみたいという方は是非ご連絡下さい。連絡先 高知市加賀野井二一四一十六 電話 〇八八八―七三―八四〇四

午後六時～九時まで中央公民館で練習しておりますが、四月からは週二～三回練習に入ります。今年五月二十一日、二十二日各一回演じます。今後は定期的な年一回発表会をするよう計画を立てています。

また、今年高知市以外でもできれば発表させていただきたいと会員一同話し合っております。若い方！男女を問いません。歌舞伎と一緒にやりませんか。練習も見て下さい。連絡先 高知市東泉寺五一九一―一八 電話 〇八八八―二二―三二八〇

た時は、地域の人々と改築運動にも参加しました。ところで、分館は地域委託ですので、学級生はボランティア活動として運営に協力しています。

学習内容は、歴史や時事問題、時には施設見学など野外学習のほか、他の文化センターで行われている各種の市民学校にも、各自思い思いに参加して自己研修に努めている今日です。連絡先 高知市棧橋通二一―一五〇 潮江市民図書館内 電話 〇八八八―三三―四〇四四

散歩の途中



かつて浦戸の海は今日より遙かに奥深く湾入し、湾内には大島(現在の五台山)をはじめ、葛島・田辺島など多くの島が浮かんでいたが、長年にわたる土砂の堆積と地盤の隆起により埋積された。竹島は後に潮江の埋立てにくずされたこともあり、往時を忍ぶものは何もない。県営竹島団地の近くに、昭和三十七年東山家によって建立されたこの碑が残るのみである。

風伯

成人式について

先ごろ県民体育館で開かれた成人式で、騒がしい若者たちを、橋本知事が「静かに話を聞きなさい」と叱ったことは、中央のマスコミでも取り上げられるほどの反響を呼んだ。地元新聞の投書欄にも、いくつか意見が出た。もっとも、こうした反響の多くは年配者のもので、若者からの反論はなかった。年配者

のようになっていくかも、考えてみる必要があるのではないかと。率直に言って、大方の若者は、成人式などどうでもいって考えているのではなからうか。どうみてもはじめからしらががあるように思うし、そんな式典を、十年一日のようにやっていることへの反省が先ではないかと思える。また二千人も三千人もの多数を集めてやることについても、ほんとうに若者一人ひとりに敬意をこめるものになっているか。これではどうみても参列者を単位の集合としか捉えてなく、とてもこの通った式にはならないのではないか。昨年よりは今年がまだましだったという前に、成人式を魅力あるものとするために、若者たちとことん話合おうべきでないか。成人式に限らず、もろもろの先例踏襲の行事について、虚心に検討すべきときに来ているように思う。(華)

高知レポート5

高知県の工業

清遠 幸男著

A五判・一一二頁
定価一、〇〇〇円(税込)



高知のトップ企業の生産現場に、長年携わってきた著者の蓄積をいかしたレポート。高知県の工業と技術に関してその歴史を振り返り、近代産業としての萌芽から現代までの歩みを概説するとともに、各業種の主要企業の概要を述べ、未来像までを描いている。

飛天コンサート 高知公演

笛と大鼓の夕べ

日時 3月10日(火) 午後7時〜 自由民権記念館

3月11日(水) 午後7時〜 要法寺

入場料 一般2000円 中高生800円

主催 高知市文化振興事業団・飛天を聴く会

〈出 演〉 大倉流大鼓方・大倉正之助 / 森田流笛方・内潟慶三

プログラム

三番叟 序の舞 道成寺 構成曲 獅子

大倉正之助さんは若手囃子方で構成するグループ「飛天」を主宰し、日本の音を伝えるため他ジャンルとの共演や海外演奏など、精力的に活動されています。今回は笛の内潟慶三さんとともに演奏していただき、あわせて日本の古典芸能のお話を伺います。

チケットは高知レポートおよび文化振興事業団で発売中です。

市民フロアがオープン

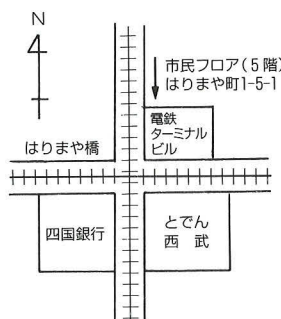
展示や会議にご利用下さい

市民の皆さん方の文化活動の場として、「市民フロア」が、四月二日からオープンします。

室内は布クロス仕上げで、絵画や写真などの展示に、また四十名程度の会の出来る会議用として、ご利用いただけます。

◆所在地

高知市はりまや町一―五―一
電鉄ターミナルビル五階



◆休室日

(一)毎週水曜日

(二)十二月二十八日―一月四日

◆使用時間

(一)展示 午前九時―午後六時

(二)会議 午前九時―午後九時

◆使用料

(一)展示

一日 一、〇〇〇円

一週間七〇、〇〇〇円

(二)会議

午前九時―正午 四、〇〇〇円

午後一時―五時 五、〇〇〇円
午後五時―九時 五、〇〇〇円

◆お申し込み

本町五―二―三 自治会館二階
財高知市文化振興事業団
(電話七三―四三六五)
に使用申込書を提出下さい。